様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年５月３１日現在

機関番号：３２６１０
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009～2012
課題番号：２１５２０２７８
研究課題名（和文）　Prose *Brut* 写本とキャクストン版『イングランド年代記』との関係
研究課題名（英文）　The Relationship between Prose *Brut* MSS and Caxton's *Chronicles of England*.

研究代表者
高木　眞佐子（TAKAGI　MASAKO）
杏林大学・外国語学部・准教授
研究者番号：60348620

研究成果の概要（和文）：
これまでキャクストン版『イングランド年代記』に書誌学上もっとも近い写本とされてきた、大英図書館所蔵の BL Additional 10099 写本の大部分が、実際には印刷本からコピーされた写本と見られる有力な証左を得た。この研究は、カリフォルニア州サンマリノのハンティントン図書館所蔵の HM136 写本が、キャクストン版の印刷用原稿である可能性を濃厚に示す証拠を写本上に示した Daniel Wakelin の発見に有力な理論的根拠を与えることになった。結論として Prose *Brut* 研究において 100 年定説になっていた BL Additional 10099 写本の重要性は根底から覆り、HM136 の重要性に新しいスポットが当たるようになった。

研究成果の概要（英文）：
In this study, I have managed to show amply that the manuscript BL Additional 10099, previously claimed to be the closest to the copy-text for William Caxton's *Chronicles of England*, is in fact simply a manuscript from the printed edition at large. Most of the research was done by extracting copy-fitting techniques at Caxton's print shop. The same research result has given a theoretical background for Daniel Wakelin's discovery of casting-off marks on the manuscript HM 136 at Huntington Library, San Marino, California. After comparing the archetype, HM136, Add 10099 and Caxton's edition, both Wakelin and I support the hypothesis that HM136 must be the very copy-text used at Caxton's print shop. As a result, the old hypothesis held for a hundred years that BL Additional 10099 was the closest to Caxton's copy-text has been overturned.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
総　計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学
キーワード：　英文学　中世　incunabula　写本　活版印刷　William Caxton　年代記　Prose *Brut*

１．研究開始当初の背景
(1) 申請段階においては BL Additional 10099 がキャクストン版の印刷用原稿にもっとも近いという説はほぼ定説として受け入れられており、研究者のこれまでの研究生活において行ってきた部分的な反論は、一般的

なものとして受け入れられていなかった。そのため、印刷用原稿に近いと思われる関連写本 190 のうちの 5 以上 32 程度に当たりそれらの違いを記述することにより、BL Additional 10099 がキャクストン版の印刷原稿である可能性が低いことを段階的に立証していく予定を立て、それを 4 カ年計画として申請した。

(2) 2009 年 4 月 Daniel Wakelin（前ケンブリッジ大学、現オックスフォード大学）が研究者を東京に訪問し、ハンティントン図書館蔵の HM 136 写本に casting-off mark（原稿の印刷時にページ割付を示すために付ける書き込み）らしきものを見つけた件について直接相談をしてきた。研究者はこれまで BL Additional 10099 写本に根本的な疑いを抱いていたが、Wakelin が提示したものはその疑いをもう一方の極から裏付ける重要な証拠ではないかと思われた。そのため、(1)で想定していたような壮大な計画は変更し、HM 136 写本の校訂に多くの時間を割かざるをえなくなった。

２．研究の目的

(1) 申請時の研究の目的は、数多くある Prose *Brut* 写本の中でキャクストン版の印刷用原稿が完成までにどのような系譜をたどったのかをできるだけ細かく特定することであった。

(2) しかし上述のように Wakelin によって HM 136 がキャクストン版印刷用原稿であるという可能性が大きく高まったため、その目的は変更され、これまでの定説であった BL Add 10099 写本の本当の位置づけと、HM 136 写本が casting-off mark 以外の観点からもキャクストン版印刷用原稿だという証拠が見出せるかどうかに目的は絞り込まれた。

３．研究の方法

書誌学の伝統的な方法に基づいて行った。まず直接写本を目にしてそこから物質的証拠を得た。次に本文校訂をできるだけ正確に行って、細かい文言の違い（異同）が書写の過程で発生したのか、あるいは印刷工程で発生したのか、可能性を吟味しテクストの派生に関する仮説を立てて言った。

(1) HM 136 写本の検証

研究者は Wakelin からの指摘を受けて 2009 年夏に初めて写本を目にした。不正確な Add 10099 写本に比べると、質の高い優れた写本であることは一目瞭然であったが、キャクストン版との異同は少なく、印刷用原稿だという結論は必ずしもすぐ得られなかった。決め手となったのは、HM 136 写本において元々間違いがある部分がキャクストン版にそのまま反映されていたこと、そして印刷工房で植字工が犯したアイ・スキップ等の間違いが、HM 136 写本を使うとうまく説明ができたことの 2 点による。

さらに、HM136 写本の来歴を知ることも重要であった。数々の書き込みからチェシャ地方の名士に所有されてきたとみられる HM 136 写本の最古の所有者は、John Leche という人物である。この名の人物は複数名知られていることから特定には至らなかったが、キャクストンと間接的に関係がある人物が所有していた可能性もある。

Wakelin による HM 136 写本の casting-off mark に関する論文は、*Journal of Early Book Society* 第 14 号(2011)に “Caxton’s Exemplar for the Chronicles of England?” (pp. 75-114)として掲載された。研究者は、この研究全般にかかる情報提供に対する謝辞もいただいている。このように HM 136 写本の検証は、Wakelin と協力し合う関係の中で実現した。

(2) Brie 版の検証

Brie 版とは 1906 年と 08 年に Friedrich Brid が出版した Prose *Brut* 写本の校訂版で、今日に至るまでもっとも権威があるとされている。しかし Brie が Add 10099 写本を Prose *Brut* 写本の印刷前の伝統の中で一番最後の写本だと考え、自分の校訂版にこれを組み込んだことにより今日に至るまで混乱が生じている。

そのような観点から検証したところ、出版当初から Brie の説には異論があったことが分かった。また、Brie の説を継承した Lister Matheson も Brie を継承してテクスト校訂を行っていたが、Brie が取り上げた続編部分のみを問題にし、Add 10099 写本の基本的なテクスト部分での本文校訂はなおざりになっていることが分かった。Matheson は 2012 年 1 月 19 日に急逝したため、直接この問題点を確認する機会が持てなかったことは非常に残念である。

結論からいえば Brie 版には前半部の信頼できる校訂部分と、Add 10099 写本を含む信頼できない校訂部分とに分けられる。100 年以上前の校訂版に欠点がない方が不思議であるが、写本から印刷本への移行期を如実に示すテキストが豊富にあるという観点からは、Brie の説はもっと早い時期から疑問を持たれてしかるべきであったし、同じ着眼点を持っていた Matheson も Brie の不確実性に気付くことなく先人を鵜呑みにしてしまったため、この分野の研究が足踏みする結果となっていたのは残念なことである。

(3) BL Additional 10099 の検証

大英図書館での調査においては、Add 10099 写本の本文異同が他の信頼できる写本に比べてどれほど多いのかを検証することに力

が注がれた。詳しく見れば見るほど、この写本を印刷用原稿に使おうとはまず考えないことは明らかな、質の低い、基本から離れた劣悪な写本だからだ。

そうした中で細かい本文校訂を複数の写本と重ねて明らかになったのは、キャクストン版にしか現れない文言、つまり印刷段階ではじめて導入された間違いが、Add 10099 写本においては繰り返し現れているという事実である。すなわち、キャクストン版を底本として写本制作をしたと仮定しなければ起こりえない語の連続が見られるのだ。

Add 10099 写本にそもそも異同が多いことから、これとキャクストン版とを比較するだけでは、これまでははっきりとした結果が得られずにいた。しかし、HM 136 写本が出てきたため、HM 136 写本とキャクストン版とを比較した時のデータと照合することが可能になり、その結果、Add 10099 写本が劣悪であるばかりでなく、こちらにキャクストン版の印刷工程で発生した本文異同の継承部分が桁違いに多いことが明らかになったのである。

４．研究成果

(1) 年代記の本文校訂をする過程で、当時の人々が史実が持つ重みを感じていなかった事実が明らかになった。Add 10099 写本においてもそれまでの写本の伝統にはまったく見られないエピソードを挿入しており、「史実」のねつ造が稀ではなかった当時の時代風潮が浮かび上がった。

このことをきっかけに、キャクストン版『アーサー王の死』においてキャクストンが第 5 章を『イングランド年代記』を使用して大幅に書き換えた問題にも新たな光明が射した。キャクストン版の変化は『イングランド年代記』の歴史性を重視したように見せかけつつも、実はより大幅にねつ造部分を増やし、アーサー王と時の王権であったチューダー朝とのつながりが深かったことを暗示している可能性が明らかとなった。

(2) HM 136 写本の来歴から、信頼できる Prose *Brut* の素材はチェシャ地方に多くあった可能性が浮上した。また、HM 136 写本に書き込みをした John Leche という名前の人物についても、複数の時代にまたがって医者や弁護士、その他の職業の人物の可能性があることが分かった。中でも、Lady Joan Bradbury の兄である John Leche はキャクストンと間接的なつながりがあった可能性が高い。

(3) 全ページに掛る本文校訂の結果、HM 136 写本はキャクストン版よりも古い写本であり、なおかつキャクストン版の印刷用原稿として機能した可能性が非常に高いことが分かった。

(4) ほぼ全ページに掛る本文校訂の結果、Add 10099 写本はキャクストン版よりも新しい写本であり、出来はそれほど良くないが、大部分においてキャクストン版そのものを底本として書かれた可能性が非常に高いことが分かった。

(5) HM 136 写本にも、Add 10099 写本にも、キャクストン版ではじめて付け加えられたとされる、続編部分が付いている。Brie 以来、Add 10099 の続編部分がキャクストン版より古く、HM136 写本の続編部分はキャクストン版より新しいとされていた。

しかし今回本文校訂をした結果、特に(3)と(4)の結果を合わせて考えると、むしろ HM 136 写本の続編部分がキャクストン版より古く、Add 10099 の続編部分がキャクストン版より新しいと考える方が妥当であることが分かった。

(6) すべてを本文校訂した結果、Add 10099 写本のはじめの 2 丁（16 葉分）は、印刷用原稿からの書写ではない。しかし、伝統的な写本からすべて写し取ったものでもなく、他には見られないエピソードが挿入されている。ウォーターマークもこの部分だけ異なっているため、別の時期に別の写本から写して書いたものを、印刷本からの書写したものと組み合わせたとみられる。

以上の研究成果は、国内外を問わず画期的なインパクトを持つものであろう。Wakelin による HM 136 上の casting-off mark の発見はそれなりに価値を持つものであるが、論文を一読すれば分かるように、本科研費研究がなくてすぐに発表できる段階にまで仕上げることができた論文とは到底思われない。本研究と Wakelin の研究とは、どちらが欠けても成り立たないワンセットとしてとらえるべき性格のものである。

言うまでもなく、これまで定説と受け入れられていた Brie 版の弱点を真っ向から突いて、覆したという点で、本研究は重要である。Add 10099 写本の持つテクスト上の欠点は、これまでも研究者にとって重要なテーマではあったが、比較対象として HM136 という極めて適切な写本が飛び込んできてくれたからこそ、ここまで信憑性の高い本文校訂を行うことができたと考えている。大学紀要に 4 年間をかけて成果発表をしたが、それらの集大成ともいえる論文を、国際アーサー王学会アメリカ支部の機関誌 *Arthuriana* に載せていただくことができ、ほっとしている。本研究の立てた仮説に対して今後賛否両論が出てくることになるだろう。細かい点はさてお

いても基本的な手法やデータ分析方法についてはかなり厳密に行ったつもりであるが、今後の評価に委ねたい。

Prose *Brut* 研究はまだ端緒についたばかりである。本文校訂を中心とする書誌学の観点からいえば、今回はわずか 2 冊の写本の派生が、印刷本との関係において明らかになったにすぎない。現存写本が 200 冊近くあることを思えば、まったくとるに足らない数字ではある。しかし、時間軸の中で写本同士、あるいは写本と印刷本との関係を明確にするという幸運にはいつも恵まれるとは限らない。今回についていえば、Wakelin の方から本研究に飛び込んできたのであり、その絶妙なタイミングについては神の計らいとでも表現するほかない。

今後はこの 2 冊を特定するために用いた、植字工による様々な「埋め草」を他の写本にも適用することにより、疑わしい写本が「キャクストン前」か「キャクストン後」なのかを判別することが容易になるだろう。今、必ずしもそうした写本が多くあるわけではないが、長く退屈な Prose *Brut* 写本は、これまで本文校訂に必要な注意深い視線を浴びてこなかった。だからこそ、百年一日のごとく、Brie 版の甘い推測が独り歩きしてしまったのだと思われる。今回、HM 136 の本文研究を進めることによって、長いテキストであっても必ずしも冗長な内容に惑わされることなく、効果的な本文の比較校訂が簡便にできる土台は少しであるが整えられたように思う。今後は研究者自身がその成果を試してみて、必要に応じて改良を加えたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

(1)Masako Takagi, “Research Note-4/4: Study on the Prose *Brut* MSS in relation to William Caxton’s *Chronicles of England* (1480),” *Kyorin University Review* 25 (March, 2013): 139-218. （査読有）

(2)Masako Takagi, “Caxton’s Exemplar and a Copy from Caxton’s Edition of the *Chronicles of England*: MS HM136 and BL Additional 10099,” *Arthuriana* 22.4 (Winter, 2012): 120-139. （査読有）

(3)Masako Takagi, “Caxton’s Revision of *Le Morte Darthur*: The Tudor Propaganda and Self-Filling Political Prophecy,” *Poetica: An International Journal of Linguistic-Literary Studies* 77 (2012): 61-78. （査読有）

(4)Masako Takagi, “Research Note-3/4: Study on the Prose *Brut* MSS in relation to William Caxton’s *Chronicles of England* (1480),” *Kyorin University Review* 24 (March, 2012): 111-211. （査読有）

(5)Masako Takagi, “Research Note-2/4: Study on the Prose *Brut* MSS in relation to William Caxton’s *Chronicles of England* (1480),” *Kyorin University Review* 23 (March, 2011): 79-95. （査読有）

(6)Masako Takagi, “Research Note-1/4: Study on the Prose *Brut* MSS in relation to William Caxton’s *Chronicles of England* (1480),” *Kyorin University Review* 22 (March, 2010): 101-114. （査読有）

〔学会発表〕（計 5 件）

(1)［研究発表］高木眞佐子「キャクストンが使用した英語エグゼンプラーの意味―Prose *Brut*写本と*Chronicles of England*（1480）」日本中世英語英文学会第 28 回全国大会 2012 年 12 月 2 日　於広島大学

(2)［パネル］「野口俊一先生追悼シンポジウム＜マロリーとその伝統＞」高宮利行（司会・慶應義塾大学名誉教授）「マロリーとピーター・ヘイリン―16 世紀のアーサー王物語受容の一断面」不破有理（慶應義塾大学）「The Editor at Work: Joseph Haselewood’s Edition of Malory（1816）」高木眞佐子（杏林大学）「HM136 写本とキャクストン版（1480）*Chronicles of England*―テキスト発展に関する考察」向井毅（福岡女子大学）「故野口先生の仕事を辿る―マロリーのテクストに残された書き込みを読む」国際アーサー王学会日本支部年次大会　2011 年 12 月 17 日　於中央大学

(3)[パネル]“Round Table in honor of Dr Edward Donald Kennedy: Chronicles and Romance.” Moderator: Michael Twomey (Ithaca College). Thomas H. Crofts (East Tennesee State U) “Here in What World? Levels of Supposed Veracity in the *Morte Darthur*.” Masako Takagi, (Kyorin U) “MS HM 136 and Caxton’s 1480 Edition: Possible Textual Development of the *Chronicles of England*.” Kevin Whetter (Acadia U) “Malory and Hardyng: Some Codicological Connexions.” Meg Roland (Marylhurst U), “The Rudderless Boat: Time and Geography in (Hardyng’s) Chronicle and (Malory’s) Romance.” 23rd Trinniel Congress of the International Arthurian Society　於英国ブリストル大学　2011 年 7 月 16 日

(4)［パネル・司会・運営］「英国年代記と国家意識―15, 16 世紀を中心に―」張替涼子（東京大学非常勤講師）「ジョン・ベレンデンによる『スコットランド年代記』と 16 世紀の国家意識」高木眞佐子（杏林大学）「散文『ブルート』とマロリーの『アーサー王の死』（1485）―党派抗争とアーサー王の正当な継

承者」井出新（慶應義塾大学）「ロンドン市民社会における国家意識の誕生―リチャード・ロビンソン『アーサー王事績肯定論』(1582)を中心に」高宮利行（慶應義塾大学名誉教授）「MaloryからDeeへ―Hardyngの年代記の影響」日本中世英語英文学会第 26 回全国大会　2010 年 12 月 5 日　於大阪学院大学
(5)[研究発表]高木眞佐子「写本校訂の実際―初期印刷本と写本との関連において」杏林大学外国語学部公開研究会第 35 回アカデミア　2009 年 6 月 24 日　於杏林大学

６．研究組織
(1)研究代表者
高木　眞佐子（TAKAGI　MASAKO）
杏林大学・外国語学部・准教授
研究者番号：60348620

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし